伊奈忠次

伊奈 忠次（いな ただつぐ）は、戦国時代から江戸時代初期にかけての武将、大名。

武蔵国小室藩初代藩主

生涯

三河国幡豆郡小島城（はずぐんおじまじょう）（現在の愛知県西尾市小島町）主・伊奈忠家の嫡男（忠家の父・忠基の末子との説もあり）に生まれる。永禄6年（1563年）に父・忠家が三河一向一揆に加わるなどして徳川家康の下を出奔。天正3年（1575年）の長篠の戦いに陣借りをして従軍して功を立て、漸く帰参することができた。家康の嫡男・信康の家臣として父と共に付けられたものの、信康が武田氏との内通の罪により自刃させられると再び出奔し、和泉国・堺に在した。

天正10年（1582年）に本能寺の変が勃発し、堺を遊覧中であった家康を本国へと脱出させた

伊賀越えに小栗吉忠らと共に貢献する。この功により再び帰参が許され、父・忠家の旧領・小島を与えられた。また三遠奉行の一人として検地などの代官であった吉忠の同心となり、後に吉忠の跡を継ぐ形で代官衆の筆頭になる。以後駿・遠・三の奉行職として活躍、豊臣秀吉による小田原征伐や文禄・慶長の役では大軍を動かすための小荷駄による兵粮の輸送、街路整備などを一手に担い、代官としての地位を固めた。

注：地形的には、東から駿河（するが）、遠州 、三河（みかわ）で、三河は愛知県で松平・徳川、遠州・駿河は今川領であった。駿遠を「すいえん」と読んで、2国を表す。

家康が江戸に移封された後は関東代官頭として大久保長安、彦坂元正、長谷川長綱らと共に家康の関東支配に貢献した。

慶長15年（1610年）、61歳で死去、遺領と代官職は嫡男・忠政が継いだ。

功績

武蔵国足立郡小室（現・埼玉県北足立郡伊奈町）及び鴻巣において1万石を与えられ、 関東を中心に各地で検地、新田開発、河川改修を行った。

利根川や荒川の付け替え普請、知行割、寺社政策など江戸幕府の財政基盤の確立に寄与しその業績は計り知れない。関東各地に残る備前渠や備前堤と呼ばれる運河や堤防はいずれも忠次の官位「備前守」に由来している。また、伊奈町大字小室字丸山に伊奈屋敷跡がある。

諸国からの水運を計り、江戸の繁栄をもたらした忠次は、武士や町民はもとより、農民に炭焼き、養蚕、製塩などを勧め、桑、麻、楮などの栽培方法を伝えて広めたため、農民たちからも神仏のように敬われていたという。伊奈町は忠次が町名の由来である。次男・忠治は茨城県筑波郡伊奈町（現在のつくばみらい市伊奈地区）の町名の由来となっており、親子2代で地名の由来となっている。

伊奈町音頭は「ハァ～伊奈の殿様忠次公の（ヤサヨイヤサ）」と歌い出される。

利根川の西遷・荒川の東遷

徳川家康が江戸に本拠を定め、領国経営を直ちに開始するが、利根川水系の河川改修も積極的に取り組んだ。 最初に行われた事業は1594年(文禄3年)、忍城主であった家康の四男松平忠吉が行った会の川締切である。これは二股に分流していた利根川のうち南流する会の川(あいのかわ)を締切り、東方向に流路を一本化して渡良瀬川(太日川)に連結するものである。

翌1595年(文禄4年)には上野館林城主であった榊原康政が、利根川左岸に総延長33km、高さ4.5 - 6m、天端(てんば)幅5.5 – 9.1mという堤防を建設した。これを文禄堤と呼び利根川における最初の本格的な大規模堤防である。同時期には中条堤も築かれている。

これら利根川水系における河川事業は三河譜代である家臣・伊奈忠次を祖とする伊奈氏が中心的役割を果たしていく。忠次が手掛けた事業としては1604年(慶長9年)烏川を取水元とし利根川沿いに開削した総延長20kmに及ぶ備前渠(びぜんきょ)用水や上野総社藩主・秋元長朝が開発した天狗岩用水下流に開削した代官堀などがある。

忠次の系統は利根川水系の河川開発に携わるが、最大の事業として知られるのが利根川東遷事業である。

利根川東遷

利根川東遷事業は江戸湾を河口としていた利根川を東へ付け替え、現在の銚子市を新たな河口とする江戸時代最大級の治水事業であり、現在の利根川水系の基礎となった。

幕府本拠である江戸、および利根川流域の水害対策としての治水目的

1. 利根川流域の新田開発促進
2. 街道や水運整備による流通路確保
3. 仙台藩伊達氏を仮想敵国として江戸城防衛のため大外堀に利根川を利用する軍事目的

利根川東遷事業の主要な事業としてはまず1621年(元和7年)から1654年(承応3年)まで3回にわたる赤堀川開削がある。これは現在東北新幹線利根川橋梁が渡河する付近の茨城県古河市・五霞町間を開削し、1621年に伊奈忠治によって行われた利根川と渡良瀬川の連結事業である新川通開削と連携して利根川の河水を東へ付け替える事業である。

続いて1629年(寛永6年)からはそれまで利根川の支流であった荒川がそれまでの入間川水系に付け替えられ(支川であった和田吉野川へ接続され)独立した荒川水系となり、これを「荒川の西遷」と呼ぶ。切り離された旧下流路は元荒川となって現在に至る。

利根川中流の武蔵国北部・中部における農業用水の水源としては1604年開削の備前渠用水があるが、それ以前より見沼という沼を灌漑用水源として利用していた。見沼は伊奈忠治により寛永年間に現在のさいたま市緑区に八丁堤という締切堤が建設されてダム化し、「見沼溜井」として1660年開削の葛西用水路と共に重要な水源となっていた。

この後、見沼の開発がさらに進むのは、8代将軍吉宗の時代を待つことになる。吉宗は紀州藩士であった井沢為永(弥惣兵衛)を60才の高齢に関わらず用い、見沼代用水(見沼にかわる用水という意味)を完成させるのである。

先人たちの底力　知恵泉「家族の命を守れ！～江戸を救った男　伊奈忠次の防災術」

[E テレ]

2015 年 12 月 1 日（火）　午後 10:00～午後 10:45（45 分）

ジャンル

ドキュメンタリー/教養 ＞ 歴史・紀行

ドキュメンタリー/教養 ＞ カルチャー・伝統文化

ドキュメンタリー/教養 ＞ ドキュメンタリー全般

番組内容

徳川家康もびっくり？江戸時代初め、現代の最新技術と同じ発想の治水で、関東を守った伊奈忠次。その極意「無理せずみんなでできることを」とは？身近で役立つ防災の知恵。

出演者ほか

【ゲスト】防災アドバイザー…山村武彦，【ゲスト】高崎経済大学名誉教授…和泉清司，東貴博，【司会】近田雄一

ゲリラ豪雨に要注意！東京と関東各地は江戸のころから、大雨ですぐ洪水が発生した水害地帯。そんな場所を、安心して暮らせる地域に整備した伊奈忠次。その手腕は徳川家康や豊臣秀吉を驚かせ、４００年も制度が受け継がれたり、現代の最新技術が同じような発想で治水をしたりするほど。自然に逆らわず、私たちにとって無理せず長続きできる防災術とは？伊奈が手がけた関東各地の治水の足跡を追い、現代でも使える防災の知恵を学ぶ。

5 伊奈忠次（一五五〇～一六一〇）

伊奈忠次は、徳川幕府草創期の代官頭（関東郡代の前身）。三河国の生まれで家康に認められ、民生に尽くし、利世安民の経済家として卓越した手腕をふるった人物である。

若い頃、一時、堺に出奔したが、天正十年（一五八二）に復帰して近習となり、同十七、十八年、徳川氏の駿・遠・三・甲・信の五カ国領国支配において、検地・知行・年貢制度の改革に活躍した。

ついで家康が秀吉から関八州への移封の命を受けた際に、江戸居城に決するに至ったのは、家康の諮問に応じた忠次の献策によるものだ、とされている。

実際、関八州の原野を、今日見るような肥沃な土地に変え、殖産の実をあげるのを可能にしたのは忠次に負うところが大なのである。家康は、忠次の働きぶりの期待通りなのを見て喜び、「関八州を己のもののごとく大切にすべし」と、さらなる期待を告げたという。

忠次が、めだって優れた人物であったことは、『寛政重修諸家譜』にも見えている。

それによれば、天正十八年二月、豊臣秀吉が小田原城攻略に進発した際、忠次は家康の命を受けて、駿・遠・三の三国の道路の普請や富士川の舟渡しのことに当たった。

秀吉が吉田に着いたとき、風雨が続いていて士卒の疲労ははなはだしかった。にもかかわらず秀吉は進発しようとする。

忠次は、そこで秀吉を止めて、

「このところに御滞座あって、晴をおまちなされませ」

と請うた。ところが秀吉は忠次を怒りつけて、

「先に川のあるのに雨にあったとき、急いで渡ってしまうのが、軍の法じゃ。そちはどうしてそれを止めるのか」

という。忠次は、さわぐところなく、

「それは小軍の場合でございましょう。今数万の大軍が川を渡るのですから、上流からの水量が時

を置いて増し、きっと溺れる士卒も出るでしょう。かりに十人溺れても噂では百人と言われましょう。さような折には士気にも影響いたします。わずかの日数の遅速が勝敗と関係いたしましょうか。しばらくは逗留あって士卒をお休めなされませ」

といった。秀吉は忠次の言を受け入れて吉田に留まること三日、快晴に乗じて軍を進めることができた。川越の際には水は引いていて何の支障もなかった。

秀吉は「三遠に良い士の多いことは耳にしていたが、忠次は正しくその一人であった」と褒めた。

忠次は、関東入国後は、武蔵国安立郡小室（現・埼玉県伊奈町）に陣居を構え、利根川、荒川の改修、新田開発、寺社政策等にもあたり、その地方の仕法は幕府の地方の基本となった。忠次の功績は、井伊・本多・榊原ら武将の攻城野戦の武勲にも劣らないのである。

忠次の没後、その子忠治、孫の忠克も関東郡代を勤めた。忠治は主に新田開発に、忠克は忠治がはじめた玉川上水開削工事を続けて江戸市民に飲料水を送り届けた。また渡良瀬川と利根川本流を結ぶ一方、霞ヶ浦を利用して銚子から内陸部への舟運を可能にするなど、伊奈一族の名をあげている。